

常に諸子の先頭に在り

陸軍中將栗林忠道と硫黄島戦

早稲田大學文學學術院教授 留守晴夫◆著



栗林忠道



栗林直筆繪手紙

◆本書目次◆

豪華巻頭口繪16頁
寫真史料多數掲載

第一章 忘れられた栗林中將

アメリカを象徴する硫黄島記念碑／日米いづれ劣らぬ勇敢極る献身／忘れ去られた栗林中將／時世の在り様で變る行動／事大打ちこはし思想と積極的健忘症／日本人は「ゴム人形」／南部人フォークナーの言葉／人間に關する普遍的眞實／自己批判こそ道徳的／美徳の寶庫、大いなる口實／眞實を追ふ狩人の傳統／勝者も敗者も哀れな裸の二足獸／忘れてならぬ敗者の見事

第二章 知が力とならぬ文化

栗林とスマスの個性の激突／合理精神の論理の絲／全滅しても敗北はない／二つの敵／敵を知る者と知らぬ者／全てを主觀的に見る傳統／日米國力の隔絶を痛感／獨往邁進主義への急激な傾斜／力が活かされなかつた知米派／知る者を排撃する風潮／人の未だ嘗て思はざる所を思ひ／爆發せんばかりの怒り

第三章 吾人將校ノ覺悟

軍人敕諭の近代的メッセージ／明治の軍人と昭和の軍人／軍閥抗争史に無縁／死に至る迄の「將校ノ覺悟」／部下達の記憶に残る栗林／奇蹟的な迄の強烈な統率／人事にまつはる恐るべき弊風／軍中央は前線の實情と遊離／滅ぶべくして滅びた帝國陸軍／最悪の事態を想定する西洋文化／我々は蟻の門人／本來の任務の自覺／忘れられた日本人／「邦家ノ將來」は「我等ノ雙肩」に

第四章 日本近代の本當の姿

硫黄島を訪ねて／最後ノ一瞬迄戦闘ヲ續行セントス／フォードA型と最新のキャデラック／凄じき肉薄戦闘／日本近代の本當の姿／騎兵廢止論／吉橋徳三郎の自決／本格的近代化を沮むもの／撮み食ひの西洋理解／悲劇を祖國教育の眞の機縁に

第五章 二つの自己認識の相剋

皇室中心主義と栗林／我等ハ國民ノ儀表ナリ／國柄への自信／二つの自己認識の相剋／哀しくも人間らしい美しい日々／戦争といふ試煉の熱鐵／自我よりも宿命の子供／民族の深部に根差した現象／硫黄島守備隊最後の奮戦／全將兵ニ告グル命令／「屍を敵に渡すな」と自決

米軍の死傷者數が日本軍のそれを上回つた唯一の戦闘、硫黄島戦。今もアメリカでは、その未曾有の激闘の有様が書物や映畫によつて語り繼がれ、先人の「平凡ならざる剛勇」が稱へられる。しかるに日本では、名將「栗林忠道」の名前すら忘れ去られて久しい……。 「アメリカとだけは戦ふな」、さう主張し續けた帝國陸軍屈指の知米派栗林が、皮肉にも米海兵隊の大軍を硫黄島に於て迎へ撃ち、壮烈な戦死を遂げる迄の實に見事な生涯を辿りつつ、昔も今も變らない日本人及び日本文化の宿命的弱點を容赦無く剔抉する、アメリカ文學者による異色の栗林中將論。

留守晴夫(るす・はるを)

昭和二三年 宮城縣仙臺市生
昭和四六年 早稲田大學第一政經學部
政治學科卒業
昭和五二年 早稲田大學文學研究科
英文科博士課程中退
現在 早稲田大學文學學術院教授
アメリカ文學專攻

四六判・上製・二七四頁
巻頭口繪 寫眞多數
定價三一五〇圓(税込)
平成一八年七月末刊

推薦の辭 松原正先生

(株)慧文社 Tel 〇三―五三九二―六〇六九 Fax 〇三―五三九二―六〇七八 東京都板橋區前野町4―49―3

〒1174-0063

〈ご注文書〉

「常に諸子の先頭に在り」を (定價―三二五〇圓)

冊注文いたします。

ご住所 〒
お名前 TEL ()

ご注文は電話またはFAXでお願いいたします。送料無料・郵便振替。